

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	渡邊 明寿香
2. 審査委員	主 査：連大准教授（兵庫教育大学） 伊藤大輔 副主査：連大教授（兵庫教育大学） 市井雅哉 委 員：連大教授（上越教育大学） 五十嵐透子 委 員：連大教授（兵庫教育大学） 海野千畝子 委 員：連大准教授（鳴門教育大学） 古川洋和
3. 論文題目	PTSD症状に対するマインドフルネスの効果に関する心理学的機序の検討
4. 審査結果の要旨	学校教育実践学専攻学校教育臨床連合講座 渡邊明寿香 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和5年2月13日（月） 16時00分～17時30分 場 所：兵庫教育大学ハーバーランドキャンパス兵教ホール(Zoomハイブリット開催) 1. 学位論文の構成と概要 (1) 構成 第1章 PTSDにおけるマインドフルネスに基づく介入の研究動向 第2章 PTSD症状とマインドフルな気づきと注意および脱フュージョンの関連の検討 (横断的検証) 第3章 マインドフルネスがPTSD症状に影響を及ぼす心理学的機序の実験的検証 第4章 臨床的応用にむけた検証（A基準に該当するトラウマ体験者を対象とした再検証） 第5章 総合考察 (2) 概要 本研究の目的は、PTSD症状に対するマインドフルネスに基づく介入の効果に関する心理学的機序について検討することであった。 まず、第1章では、PTSDに対するマインドフルネスの研究動向について概観した。その結果、マインドフルネスに基づく介入のPTSD症状に対する効果が示されている一方で、心理学的機序の検証が必要であると考えられた。具体的には、「マインドフルな気づきと注意」と「認知的フュージョン」というマインドフルネスの構成要素がPTSD症状の改善に果たす役割を明確にすることによって、PTSD治療にマインドフルネスに基づく介入を実施する際のアセスメントポイントや、より効果的な支援法の確立につながることを指摘された。 第2章では、マインドフルな気づきと注意の向上と認知的フュージョンの低減がPTSD症状の改善にどのように関連しているかを明らかにするために、広義のトラウマ体験者を対象にした質問紙調査を実施した。その結果、従来、推奨されてきたトラウマに焦点化した認知行動療法において介入ターゲットとされてきた心理学的要因と比較しても、これらの構成要素は、PTSD症状に影響を及ぼす重要な要因であることが示された。さらに、これらの変数がPTSD症状に影響を及ぼすプロセスを検討した結果、マインドフルな気づきと注意が認知的フュージョンを媒介してPTSD症状に影響を及ぼすことが示唆された。

第3章では、マインドフルな気づきと注意の向上と認知的フュージョンの減少がPTSD症状の改善に及ぼす影響を明らかにするために、広義のトラウマ体験者を対象とした実験を行った。その結果、マインドフルネスに基づく介入を実施することによって、マインドフルな気づきと注意の向上や、認知的フュージョンの低減がみられたのと同時に、PTSD症状の改善が示された。また、それぞれの変化量の関連を検討した結果、認知的フュージョンの変化がPTSD症状の変化と関連していたことが示唆された。

第4章では、DSM-5のPTSDの診断基準Aに該当するトラウマ体験者に限定したとしても、第2章および第3章の広義のトラウマ体験者から得られた研究知見が、当てはまるかどうかを検証するために、質問紙調査と実験結果の再解析を実施した。その結果、広義のトラウマ体験者を対象として得られた研究知見が、狭義のトラウマ経験者にも概ね当てはまることが示された。

第5章では、一連の研究で得られた結果を概観し、PTSD症状に対するマインドフルネスに基づく介入の心理学的機序や心理学的支援の示唆について考察した。特に、PTSD治療におけるマインドフルネスの活用について、特に「自分の思考に過度に巻き込まれず、心的出来事の一つとして捉えられること」の重要性が実証的に示されたことから、これらを臨床上、効果的に機能させるための介入の要点についても考察した。本研究では、複数の限界点があるものの、本研究で得られた知見は、PTSD治療にマインドフルネスに基づく介入を実施する際のアセスメントポイントや、より効果的な支援法の確立につながるものであると考えられた。

2. 審査経過

(1) 審査概要

渡邊氏の論文概要についての口頭発表が行われ、各審査委員から論文内容についての質疑、それらへの渡邊氏の応答を経て、審査委員会による審査が行われた。

(2) 学位論文の独創性と発展性について

本論文は、単にマインドフルネスのPTSD症状に対する効果を検証するのではなく、調査や実験などの複数の手続きを用いて、その効果機序を多角的に検討した点が独創的である。結果として、トラウマの客観的な衝撃度に関わらず、マインドフルネスの実践において、認知的フュージョンの重要性を明らかにされたことは意義深い。今後の発展としては、この役割を加味したアセスメントや介入手続きが導入されることによって、より効果的なトラウマケアに繋がることが期待できる。

(3) 学校教育の実践への貢献あるいは社会的貢献

マインドフルネスなどのトラウマ非焦点化技法は、エクスポージャーなどのトラウマ焦点化技法と比較しても、集団介入や予防的介入という点で汎用性が高い。本論文のように、特定の介入効果の作用機序を明らかにすることは、その効果のみならず、安全性の担保にもつながる。今後は、教育領域での学級集団を対象としたマインドフルネスの実践や、被災などの広範な被害者が想定されるトラウマに対する心理教育として活用が期待され、本論文は、その可能性を検討するための一助となった。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は渡邊明寿香の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。